

2026.07.19.

「一つの群れとなる」

旧約 イザヤ書 49章5～6節

新約 ヨハネによる福音書 10章16～21節

1. はじめに

イザヤは「**主の御目にわたしは重んじられている。**」（イザヤ 49:5）と告げましたように、私共は神様に大切にさせていただいてます。私共は7月に入りまして、ヨハネによる福音書10章から御言葉を受けていますが、先週までのところで、イエス様が良い羊飼いであり、私共がイエス様の羊であることが告げられておりました。私共はイエス様の羊の囲いの中におりますし、良い羊飼いであるイエス様が私共のために命を捨ててくださいましたので、全ての悪しきものから守られています。そしてイエス様の羊は、良い羊飼いであるイエス様の声を知っており、その声を聞き分け、その声に従います。羊飼いは自分の羊に必要なものを良く知っていますので、羊が食べるためことが出来るように青草の原に導いてくださいますし、水場にも導いてくださいます。私共は自分の力や努力で必要なものを手に入れていると思っているところがありますけれど、実は与えられていることがとても多いのではないかと思います。私も若い時は自分ちの力で何とかしよう、何とか出来る、何とかしなければならぬと思っていました。しかし、この年になって振り返ってみますと、全ては与えられ、備えられていたなと思います。使徒パウロは第一コリント15：10で「**神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。**」と告げましたが、本当にそうだなと思います。もちろん、私共が真面目に努力したことが意味が無いということではありません。また、いつも良いことばかりだったわけではありません。でも、今にして思いますと、どのような時も神様の守りと支え、そして導きの中に生かされていたと思うのです。皆さんもそうではないでしょうか。今朝、私共はここに集って、共に礼拝を捧げているわけですが、神様の導きの中で信仰が与えられていなければ、互いに顔を合わせることもなかったでしょう。それだけではありません。夫も妻も子どもも、神様が備え、与えてくださいました。私は昨年4月に富山からこの宮崎の地に遣わされてまいりましたが、それまで一度も宮崎に来たこともありませんでしたし、友人も一人もおりませんでした。しかし、今はこうして毎週皆さんと共に父・子・聖霊なる神様を礼拝しており、兄弟姉妹の交わりを与えられています。本当にありがたいことだと思っています。神様の恵みの御手の中にあるからです。

2. 囲いに入っていない羊①：ユダヤ人の外

さて、今朝与えられている御言葉16節においてイエス様は「**わたしには、この囲いに入ってい**

ないほかの羊もいる。」と告げられます。「この囲い」というのは、1 節でも告げられておりましたけれど、イエス様の救いを指していると理解して良いでしょう。そして、イエス様の羊は「囲いの外」にもいると言われるのです。そしてイエス様は「その羊をも導かなければならない。」と告げられました。これは、どういうことでしょうか？「囲いの外」というのは、第一にユダヤ人以外、つまり異邦人を指しています。第二にキリストの教会の外の人を指しています。順に見ていきましょう。

まず、イエス様がこれを話された時、ユダヤ教徒の人達、特にファリサイ派の人達は「自分たちユダヤ人以外の人、つまり異邦人は決して救われない」と考えておりました。私共日本人も異邦人ということになるのですけれど、ユダヤ人達は異邦人の救いなどはありませんと考え、そのように教えておりました。しかし、イエス様の福音は今や全世界に広められ、異邦人にも福音は宣べ伝えられ、おびたしい数の異邦人達がイエス様の救いに与っています。私共もそうです。異邦人たちがイエス様の救いに与るようにと伝道に邁進したのが使徒パウロでした。それはイエス様がパウロをそのようにするようにと召し出して、遣わされたからです。しかし、使徒言行録などを見ますと、パウロが伝道した時代、ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者との間では少なからずわだかまりといますか、差別といますか、対立といってもよいようなものが根深くあったことが分かります。ユダヤ人キリスト者からすれば、割礼を受けて律法を守らなければ救われないと教えられ、信仰の歩みをしてきました。しかし、イエス様は自分の力で救われるのではない、ただ信仰によって、ただ恵みによって救われるという道を十字架と復活によって与えてくださいました。これが福音です。ユダヤ人キリスト者もイエス様を救い主と信じていましたけれど、「割礼は要らない、律法を守らなくて救われる、ただ信仰だけだ」とまでは言い切れなかったのでしょうか。しかし、パウロはそれを明言し、異邦人に福音を宣べ伝えていきました。そこで、パウロによって伝道された異邦人キリスト者、実際にはギリシャ人キリスト者ですが、彼らとユダヤ人キリスト者の間に、軋轢が生じてしまいました。それは具体的な教会生活において、ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者が食事を一緒にしないという形で現れました。ユダヤ人キリスト者にすれば、旧約に記されている「食べてはならない食物リスト」（レビ記 11：1 ～ 23）を忠実に守ることが、大切な事でしたけれど、異邦人にはそのような習慣はありませんでした。そもそも、異邦人とともに食事をするということ自体がユダヤ人には汚れる行為だったからです。この軋轢は大変なもので、キリスト教会が最初に直面した難関でした。しかし、これをキリストの教会が越えていくことが出来たのは、このイエス様の御言葉「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。」があったからであり、その御心を実現するようにとイエス様が聖霊をもってパウロを始め使徒達を導かれたからです。このイエス様の言葉は、イエス様の羊はユダヤ人という民族の囲いの外にもいることを示したわけです。

3. 囲いに入っていない羊②：キリスト教会の外

第二に、イエス様がこれを語られた時には、まだキリストの教会はありませんでしたけれど、イエス様の頭の中には、これから弟子たちによって建てられていくキリストの教会がイメージされていたと考えて良いでしょう。イエス様を愛し、信頼する、この囲いに入っているイエス様の羊とは、現代においては教会に集っているキリスト者と理解することが出来ます。しかし、イエス様は自分の羊はそれだけではない。この囲いの外に、つまりキリスト教会の外にもいる。その羊をも導かなければならないとイエス様は告げられます。これは、まだ教会に来たことも無い人、或いはキリスト教に反対している人、そのような人の中にも「イエス様の羊」がいるし、イエス様はそのような人にも信仰を与え、救いへと導かなければならないと告げられたわけです。それはイエス様の「罪人達を何としても救いへと導く」という堅い御意思が言い表されたものだと言って良いでしょう。このキリスト教会の外にいる人の誰がイエス様の羊なのか私共には分かりません。しかし、イエス様は知っておられる。そして、その人はイエス様の羊としてやがて囲いの中に導かれる、イエス様の救いに与ることになっている。それは救いに与る人を神様が既に選びの中で決められているということです。私共はイエス様の救いの御業に与る人が一人また一人と加えられていくことをいつも祈り、願っています。教会はそのために何でもします。しかし、このイエス様の羊が生まれていくのは、そのような私共が為す伝道の業による結果としてもたらされるものではありません。その人はもうそうなることが決まっている。神様はお決めになっているし、イエス様はその人を知っている。私共はその人に出会うために、その人がイエス様の救いの恵みに触れることが出来るようにと、精一杯のことを為していく。それが伝道するということです。

4. イエス様の声を聞き分ける

囲いの中に入っている羊も囲いの中に入っていない羊も、共通点があります。それは**イエス様の「声を聞き分ける」**(3、16 節)ということです。囲いの中にいる羊が「良い羊飼い」であるイエス様の声を聞き分けるというのは分かります。しかし、囲いの外にいる羊がイエス様のことを聞き分けるとはどういうことなのでしょう？聖書の言葉を聞いてて、囲いの外の羊がすぐにそれを受け入れ、信仰者となるのなら話は簡単です。しかし、実際にはそのようなことが起きるのは希なことでしょう。これは、囲いの外の羊もイエス様の救いやイエス様の恵みを「知るようになる」ということを示しているのではないのでしょうか。今は私達の伝えようとしていることをさっぱり聞こうとしてくれないかもしれません。或いは反発するかもしれません。しかし、今はそうであっても、イエス様の羊はイエス様の声を聞き分けるように必ずやがてなるということです。

私が教会の礼拝に通うようになって、1 年半ほど説教が分かりませんでした。家で聖書を読んでも、何が言いたいのかさっぱり分かりませんでした。私はキリスト者の家庭で育ったわけではありませんが、18 歳で教会に行くようになるまで全くキリスト教については知りませんでした。し

かし、教会の礼拝に通うようになって1年半ほどしたある時「自分が罪人である」ということが分かりました。それは人と比べて自分は悪い奴だと思ったということでは全くありませんでした。人と比べなどという余裕もなく、ただ自分の身勝手な姿を見せつけられるという不思議な体験でした。言い訳のしようもなく、ただ涙して神様に赦しを求めるしかありませんでした。その時から、礼拝の説教が自分のために語られていることが分かりました。聖書の言葉が私に神様が語りかけてくる言葉となりました。そして、洗礼を受けました。皆さんもそうだと思います。ある時から「イエス様の声を聞き分ける」ことが出来るようになったのでしょう。それまでイエス様が何度声をかけても聞き分けることができなかった。ところが、ある時聞き分けることができるようになった。私共の周りにいるまだイエス様を知らない人にも、そのような時が備えられている。そのことを私共は信じて良いのです。

5. 一つの群れになる

イエス様はそのご自分の羊達は「**羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。**」と告げられています。「一人の羊飼い」とはイエス様のことです。そしてこの「一つの群れ」というのは、「キリストの体」とも言われる「公同教会」を指していると考えて良いでしょう。私共は教会といいますと、自分が出席している教会のことしか考えない、考えられない所があります。私共が出席している教会は大切です。しかし、イエス様が「一つの群れ」と言われた時、それは歴史を貫き、全世界に広がっている「ただ一つの教会」を指しています。それは実に私共の想像を超えた、壮大な一つの群れです。私共の教会は、このただ一つの群れ、ただ一つの教会、キリストの体なる公同教会に連なっています。日本基督教団もローマ・カトリック教会も、聖公会も、ギリシャ正教もロシア正教も、全てのキリスト教会はこの公同教会に連なり、公同教会の一部を構成しています。そして、それらの教会に連なっている全てのキリスト者によって構成されています。今、私共はそれを目に見える形で一つになっていることを確認することは出来ません。しかし、全てのキリスト者は聖書を通して「ただ独りの良い羊飼い」であるイエス様のみ声を聞いています。そして、父・子・聖霊の神様を賛美し、礼拝しています。聖書はたくさんの言語に翻訳されていますから、実際にはたくさんの言語でイエス様のみ声を聞いていますし、讃美歌もたくさんあります。洗礼や聖餐のやり方も色々あるでしょう。でも、みんな一つの群れに連なっています。それはただ一つのイエス様の命に繋がっているということです。このことが明らかになる時が来ます。それが終末の時です。代々の聖徒たちが、様々な国の人達が一つになって神様を賛美することになります。私はその日を楽しみにしています。

6. 命を捨て、再び受ける

さて、イエス様は続いて17. 18節で「**10:17 わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それ**

ゆえ、父はわたしを愛してくださる。 10:18 だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」と告げられました。これはイエス様が十字架に架けられること、そして復活されることを予告しています。

イエス様が十字架にお架かりになられたことについて、イエス様だって死にたくななんてなかったはずで、ユダヤ人達に捕らえられ、ローマ帝国の総督ピラトによって十字架に架けられることを決められて、遂には十字架に架けられてしまった。嫌々だった。仕方なくそうってしまったと考える方もおられるかもしれません。しかし、イエス様はここではっきりと「そうではない」と断言されています。イエス様はこの時既にご自分が十字架に架けられることを知っていましたし、イエス様は「私は命を捨てる」と言われました。しかも三度も「捨てる」と告げられました。「捨てる」というのは、自分の意思でそうするということです。他の誰かに強いられるわけではありません。イエス様は自分の命は誰かに奪われるのではない。殺されるのではない。そう告げておられるわけです。イエス様はご自分の意思でそうされました。

どうしてでしょうか？一つは、それが父なる神様の御意思、御心だったからです。全く罪のない神の独り子あるイエス様を十字架に架けることによって、私共の一切の罪の裁きを引き受けさせる。そのことによって、イエス様を信じる全ての者の罪を赦し、神の子とし、救うためです。イエス様はそのために天から降られました。イエス様はこの父なる神様の御心をご存知あり、それに従われたわけです。「これは、わたしが父から受けた掟である。」とイエス様が言われたのは、十字架に架かることが神様からの掟だから、仕方なく従ったという意味では全くありません。そうではなくて、父なる神様とイエス様が愛において、一つであられたからです。イエス様の父なる神様との信頼、父なる神様との愛、父なる神様への従順、それが十字架において示されたわけです。

そしてもう一つ。それはイエス様は十字架の死で終わらないことを知っておられました。ご自分が復活されることを知っておられました。イエス様は十字架の上で自らの命をお捨てになった。しかし、その命を「再び受ける」こと、つまり復活されることを知っておられました。このことによって、イエス様はこの地上の命が全てではないことをお示しになったわけです。そして、ご自分の羊にこの復活の命を与えるために、イエス様は十字架にお架かりになられました。少し後の 27. 28 節に「10:27 わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。 10:28 わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。」と告げられている通りです。

7. 悪霊に取り憑かれているのは誰か？

このようなイエス様の言葉を聞いても、すぐに受け入れ、納得できるものではないでしょう。「死んだらおしまい」とみんな思っているからです。これはいつの時代でも、どの国や地域でも常識で

す。確かに、例外なく誰でも肉体の死を迎えます。しかし、イエス様はそれでは終わらないと言われる。このイエス様の言葉を聞いたユダヤ人達は二つに分かれました。イエス様の言葉を聞いて「**彼は悪霊に取りつかれて、気が変になっている。なぜ、あなたたちは彼の言うことに耳を貸すのか。**」と言う人と「**悪霊に取りつかれた者は、こういうことは言えない。悪霊に盲人の目が開けられようか。**」と言う人に分かれた。これもいつの時代でも同じです。イエス様の復活を告げる言葉に対して、全ての人が受け入れて納得することはありません。しかし、逆に全ての人が反発し否定するわけでもありません。でも思い出しましょう。そのようにイエス様に反発し、否定する人の中にも、やがて変えられる「イエス様の羊」がいるということを。私共も以前はそうだったのですから。

この時イエス様の救いを受け入れられない人は、イエス様を「悪霊に取り憑かれている」と言いました。しかし、このような言葉は誰に対しても言うてはならない言葉でしょう。しかし、自分と意見が違う、立場が違う、そういう人に対して、私共はしばしばその人の全人格を否定するような言葉を口にしてしまいます。自分は正しいと思っているからです。本当に悪霊に取り憑かれているのは誰なのかと思わされます。これは本当に気をつけなければなりません。正しいのは神様・イエス様だけです。私共はどこまでいっても正しい者になることはありません。自分の意見や考えは変わるものです。変わっていかなければおかしいでしょう。私共の信仰だってそうです。ですから、使徒パウロが「**自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。**」（ローマ 12:3）と告げたように、自分は正しいのだと思い上がって、自分と意見の違う人を見下すような愚かさから解き放たれていきたいと心から願うのです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、主イエス・キリストの父なる全能の神様。

今朝も私共をここに集わせてくださり、御言葉を与えてくださり感謝します。イエス様は父なる神様を愛し、自ら私共のために、私共に代わって十字架にお架かりになってくださいました。その尊い血しおをもってイエス様の羊としていただいた私共です。イエス様の御体なる教会に繋がることが許され、永遠の命をいただき、まことにありがとうございます。どうぞ私共がイエス様のみ声に従って、いよいよあなた様を愛し、信頼し、お従いしていくことが出来ますように。自分が正しい者であるかのような思い違いをして、傲慢になることがありませんように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン